



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2827 号 2016.1.24 発行

なぜ人は人を助けるのか 精神科医、片田珠美が読む『だから人間は滅びない』天童荒太著 産経新聞 2016年1月24日

『だから人間は滅びない』天童荒太著 (幻冬舎新書・840円+税)

精神科医として診察していると、他者とできるだけ関わらないようにして生きている孤立した方に会うことが多い。人間関係で傷つき疲れ果てた結果、選択せざるを得なかった一種の防衛なのかもしれないが、こういう方ほど、本書の著者が指摘している「寂しいわきまえ」を持っているように見受けられる。

「自分が手を差し伸べないのに、他人にそれを求めることはできない」というわけで、一見立派に見えるが、自分が困った状況に陥っても、誰も救ってくれないという現実を引き受けなければならない。



そうすると、何らかの問題に直面しても、助けを求めることさえできず、生き延びることが困難になるかもしれない。そこで、人々の孤立化の進行に危機感を覚えた著者が、さまざまな「つながり」を大切に育てている人やグループと対談した連載をまとめたのが本書である。

被災地の子供支援、産後の母親ケア、障害者雇用など、さまざまだが、いずれにも共通しているのは人の志と熱意、そして善意である。ただ、著者の冷徹なまなざしは、何かの形で人を助けたいという、やむにやまれぬ感情で始めたにせよ、感情に動かされたらダメだ、という理性でコントロールする方向にもっていかないとうまくいかないことを見抜いている。

また、核心をついた鋭い指摘も数多く、ハッとさせられた。「自分がつらい思いをした、だから次の人にはラクをさせてあげよう、とはなかなかならない」という指摘には、そういう攻撃の連鎖に悩んでいる方をたくさん診てきたので、なるほどと思った。「社会への正当な参加の道は一般企業への就労だけなのか」という疑問にも、ひきこもりの患者の治療目標を社会適応や就職とすることに抵抗を感じている身として、共感した。

本書全体に流れているのは、強い危機感である。「なぜ人は、人を虐げないと、生きていけないのか」というテーマを追究してきたからだろうが、そういう問題意識が根底にあるからこそ、「なぜ人は、人を助けるのか」という著者の問いかけが胸に響く。(幻冬舎新書・840円+税)

論説：子どもの貧困対策 官民の連携が大切になる 佐賀新聞 2016年01月23日

平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす「子どもの貧困」が問題となる中、政府は児童扶養手当の増額や、ひとり親が安定した職業に就くための対策などを予算化した。まだ不足点は多いものの確実な前進である。

2013年に子どもの対策推進法が成立し、14年8月に対策大綱が策定された。経済

的な理由で夢をあきらめることなく、全ての子どもたちが希望を持って成長していける社会を目指す大綱はうたっている。

子どもの貧困率は12年の時点で16・3%に達し、ほぼ6人に1人が該当する。母子家庭などひとり親家庭に限れば50%を超える。この水準は経済協力開発機構（OECD）加盟34カ国の平均よりも悪く、豊かな社会にそぐわない状況が表れている。

対策ではひとり親世帯がポイントになる。母子家庭の親は8割が働いているが、1世帯当たりの年間総所得の平均額（13年）は約235万円。不安定なパートやアルバイトが多く、全世帯平均（約529万円）の半分もない。

さらに問題なのは子どもが大人になってからも、貧困から抜け出せない傾向が現れている点だ。誰もが成功のチャンスがある自由社会でありながら、育った環境の格差で未来が決まるようでは活力がなくなる。「貧困の連鎖」を政策で断つことが必要だ。

今回、2人以上の子どもがいるひとり親世帯に支給する児童手当の引き上げや、所得が少ない世帯を対象に保育所などの保育料の負担減を図る。さらに親が就職に必要な資格を取りやすくなるように支援金制度を充実させ、入学金、資格取得後の就職準備金貸与制度も新設した。

経済的な自立を促す政策を打ち出したのは前進である。ただ、貧困の連鎖を断つには子どもの教育対策が重要になる。児童扶養手当は18歳に達した年度末で支給が打ち切られる。それでは進学意欲が失われかねないとして、20歳までの拡大を求める声がある。

進学に関しては、返済がいない奨学金の拡充も要望が強い。貧困家庭の子どもたちはほかにも多くの問題を抱えており、幼児の段階からライフサイクルに合わせ、多様な支援体制をどう整えていくのかが問われている。

民間ではひとり親家庭などに食料を届けたり、無料の学習支援を続けているところがある。朝食をとれないまま学校へ通っている子どもたちに、無料で食事を提供する食堂活動も展開されている。

ある程度の収入があっても、子どもが多くて教育費をねん出できない世帯は公的支援が届きにくい。行政は政策の隙間を見つけるのが不得手で、そこは民間が得意とする分野だろう。子どもの貧困対策では官民連携が不可欠だ。

課題は資金である。民間団体はどれも無償活動で赤字を抱えているという。国民運動の看板事業として立ち上げた「子どもの未来応援基金」は、新年度からNPOなどへの助成を始める。まだ、寄付金が大幅に足りない状況だ。

佐賀県も新年度から始まる子どもの貧困対策計画を検討中だ。教育支援、生活支援、保護者の就業支援、経済的支援が柱。「未来への投資」として民間との連携を探りつつ、実態に合ったプランを進めてもらいたい。（宇都宮忠）

## 虐待「様子見しない」 医師ら防止を議論

琉球新報 2016年1月24日

子どもへの虐待をどう防ぐかについて話す登壇者＝23日、南風原町新川の県医師会館

子育て支援フォーラム in 沖縄「子育ての応援とゼロ歳児からの虐待防止を目指して」（日本医師会、SBI子ども希望財団、県医師会主催）が23日、南風原町の県医師会館であった。県内外の小児科医、産婦人科医、研究者らが、若年妊娠へのアプローチや依存症への対応など、児童虐待を防止するために取り組むべきことについて提言した。

県立中部病院小児科の小濱守安医師は2000年から15年までに同院で関わった虐待事例（疑いも含む）が延べ287件あり、そのうち65・8%が6歳未満児だったことを報告。「逃げるができない年齢の子が被害に遭っている」と説明した。その上で「虐待



が疑われる場合は児童相談所、市町村に通告する。様子見をしない。様子を見ている間も虐待は続いている。子どもが第一優先」と強調した。

子どもを虐待死させた親の面接をしている山梨県立大学の西澤哲教授は、虐待傾向がある親に依存の病理が多いことを指摘。「パチンコ依存など依存症へのアプローチが必要」と話した。

基調講演をした女性クリニックWe! TOYAMAの種部恭子院長（産婦人科医）は、若年層の望まない出産への対策に、早く妊娠に気付くための方法を教えることや相談できる環境を作ることを挙げた。

## ロープで拘束して顔に熱湯、胃は空っぽ 交際相手とともに3歳女兒を死においやった2歳母親は妊娠8カ月だった… 産経新聞 2016年1月24日

藤本彩香容疑者（フェイスブックから）

埼玉県狭山市で3歳の藤本羽月（はづき）ちゃん（3）が自宅マンションで死亡しているのが見つかった事件は、捜査が進むにつれ、保護責任者遺棄容疑で逮捕された母親と内縁の夫の激しい虐待の状況が浮かび上がってくる。埼玉県警が、執拗かつ日常的だったとみている羽月ちゃんへの虐待、その背景には何があったのか。（さいたま総局 菅野真沙美、宮野佳幸）



大河原優樹容疑者の車に飾られていた藤本羽月ちゃん（左）と姉のキーホルダー ※一部画像処理しています

「皮膚が剥離し…」

藤本彩香容疑者と長女、大河原優樹容疑者、羽月ちゃん（右から）＝LINEから ※一部画像を処理しています

「女の子の顔にあんな（やけどの）傷は考えられない。鬼畜だ」

県警の捜査関係者はそう怒りで

声を震わせる。1月9日、遺体で見つかった羽月ちゃんは、鼻や目を覆うように顔全体にやけどを負い、体には「皮膚が剥離（はくり）したようなものなど、傷が体全体のあちこちにあった」（捜査関係者）。



（捜査関係者）。

捜査関係者によると、逮捕された母親の藤本彩香容疑者（22）と交際相手の大河原優樹容疑者（24）は、LINEで「帰ったらこうしよう」「今日も水をかけよう」などと虐待内容を相談していた。

押し入れには金具がつけられており、ロープを使って羽月ちゃんを閉じ込めていた可能性もあるという。やけどは大河原容疑者が熱湯をかけたとみられる。発見時の羽月ちゃんはやせ細り、胃には食べたものが残っていない状態だった。

### 妊娠8カ月、喜怒哀楽激しく

知人らによると、母親の彩香容疑者は明るく人見知りをしない性格。キャバクラなどに勤めていたが、人前で泣いたり怒ったりと喜怒哀楽が激しい一面があり、勤務態度の問題で店を解雇されたこともあったという。

羽月ちゃんと長女（4）はいずれも前夫の間の子供で、彩香容疑者はその当時のブログに「（長女の名前）ほんとにテレビっ子。テレビと喋ってるからね。ちょお可愛い！」「昨日から何も食べてない。38℃ちょいあるし、赤ちゃん大丈夫かな？」と長女との生活の喜びや、おなかの羽月ちゃんを心配する文章を載せていた。

「子供たちにサンタさんちゃんと来てました」

昨年12月25日には、彩香容疑者は「LINE」で羽月ちゃんと長女へのクリスマスプレゼントのおもちゃや、大河原容疑者と交換したアクセサリーなどの写真を掲載し、幸

せな家庭をアピールしていた。

ブログでは第3子が妊娠8カ月になったことを明らかにし、「残りの妊娠生活楽しみます」とも書いていた。

おなかの子供の成長と歩を合わせるかのように「秋口から羽月ちゃんへの虐待がエスカレートしていった」。2人は調べに対し、そう供述しているが、虐待の芽は大河原容疑者との交際前からあったと知人は話す。

知人のスナック経営の女性（65）は、彩香容疑者の母親が「家に帰ったら娘が羽月ちゃんをトイレに閉じ込めていた。どうしてこんなことをするのか」とこぼすのを聞いた。また、一昨年夏に娘2人を連れた彩香容疑者と夏祭り会場で会い、「1日一緒にいたのに羽月ちゃんは笑顔がなく無表情で、『ちょっと普通じゃない』と虐待を疑った」と振り返る。

別の知人男性（32）は同じ頃、花見の席で一緒になった彩香容疑者が羽月ちゃんを叱るときに手をたたいたり、引っ張り倒すように座らせていた様子が印象に残っていると話す。「羽月ちゃんは自分で進んで何かをしようとせず、ビクビクしていつも彩香容疑者の顔色をうかがっていた。1歳半の子供の反応じゃなかった」

### 大河原容疑者は「嫉妬激しく縛り付ける人」

一方の大河原容疑者は、どんな人物なのか。

知人女性は「日高市内の中学、高校に通っていたときからあまり良い噂を聞かなかった。以前交際していた友人が暴力を振るわれたことがある」と声をひそめる。彩香容疑者も大河原容疑者について「嫉妬が激しくて縛り付ける人」とこぼすことがあった。

彩香容疑者は昨年5月以降、母親らと暮らしていた家を出て、娘2人とともに大河原容疑者と同居を始めた。6月には羽月ちゃんと長女が保育所に入所し、「子供が保育所に行けるようになった」と喜んでいたが、夏に妊娠が分かり、羽月ちゃんらはわずか十数日間保育所に通っただけで自宅での生活に戻っていた。

#### 広告

以前は母親や友人らと周囲の飲食店で頻繁に飲み歩く様子が目撃されていた彩香容疑者だったが、その頃からぱたりと現れなくなった。

また、彩香容疑者はブログやラインに交際相手とのやりとりを赤裸々につづることが多かったが、昨年11月ごろには大河原容疑者との別れ話が出たためひどく落ち込み、精神的に不安定な様子だったという。

### 2度の110番生かさねず

近くに住む男性（30）によると「昨年11月ごろから外で羽月ちゃんの姿を見かけなくなった」。ただ、それ以前にも虐待のサインは出ていた。

近隣住民は昨年6月に家の外に出された羽月ちゃんがブランケットにくるまって泣いているのを目撃し、110番通報した。7月にも「30分前から室内で女の子が泣き続けている」という通報が寄せられていた。

駆けつけた警察官に2人は「自分たちがけんかをして子供を閉め出してしまった」「風呂に入れようとしたときに叱ったら泣き出した」と説明。警察官は羽月ちゃんの体に目立った傷などが確認されなかったため、県警内部の虐待情報集約システムへの情報登録や、児童相談所への通告は行っていなかった。

また、羽月ちゃんと姉は乳幼児検診を受けていなかった。そのため狭山市職員が平成25年4月～27年5月に計3回自宅を訪問し、羽月ちゃんや姉、彩香容疑者らと面会を行っているが「虐待のサインは確認できなかった」としている。

児童虐待防止全国ネットワーク理事長の吉田恒雄氏は「市民の通報に警察が答えられず、市の虐待リスク判断も不十分だった。警察と市、児童相談所の連携の谷間に落ちたケースだ」と話す。

彩香容疑者の知人女性は「あの子には羽月ちゃんと同じ目に遭わせてやりたいと思うぐらい怒りを覚える。でも警察や市も何とかできたんじゃないかという気持ちがぬぐえない」と訴え、「羽月ちゃんのあどけない顔が目浮かぶ、助けてあげたかった…」と涙をこぼす。

3歳のいたいけな少女を救う手立てはなかったのだろうか。

『殺人犯との対話』 小野一光 著 (文芸春秋・1566円)



西日本新聞 2016年01月24日

『殺人犯との対話』 小野一光 著 (文芸春秋・1566円)

北九州監禁連続殺人事件、秋田児童連続殺人事件、大阪2児虐待死事件、福岡一家4人殺人事件、中洲スナックママ連続保険金殺人事件…。

本書は、日本を震撼(しんかん)させた21世紀の十大殺人事件の深層に迫ろうと、その首謀者や実行犯を拘置所の面会室などに訪ね、「対話」を試みたルポである。

直接、彼らと「対話」できたケース、それが無理だったケースもあるが、そこで語られ、伝えられた生の言葉はやはり衝撃的だ。事件を語りながら、ある男は「私の裁判はね、司法の暴走ですよ。魔女裁判です」とうそぶき、「私の『生』そのものがあるべきではなかった」と後悔の念に沈む者もいた。

筆者は北九州市出身。雑誌編集者や雑誌記者を経て、現在、フリーライター。本書は「人はなぜ人を殺すのか？」に迫ろうと単独取材し、「週刊文春」連載中から反響を呼んだ。

作家、畑中章宏が読む『へろへろ 雑誌『ヨレヨレ』と「宅老所よりあい」の人々』(鹿子裕文著) 面倒だからこそ寄り添う 産経新聞 2016年1月24日  
『へろへろ 雑誌『ヨレヨレ』と「宅老所よりあい」の人々』鹿子裕文著(ナナログ社・1500円+税)



福岡市の老人介護施設「宅老所よりあい」は、平成3年に社会福祉士の下村恵美子と、認知症を抱えた一人暮らしの女性の出会いから生まれた。当時、老人たちは、デイサービスの不備から行き場をなくしていた。そんな状況に下村は、「ばあさま一人の面倒もみきらんで、なんが福祉か！ なんが介護か！」と怒りを爆発させる。「もう誰にもたのみやせん！ 自分たちでその場ちゅうやつを作ったらよかつちやろうもん！」

著者の鹿子裕文(かのこ・ひろふみ)は編集者だったが、「よりあい」の世話人になり、介護の現場と特別養護老人ホーム開設のドタバタに巻き込まれていく。さらに鹿子は、施設の活動を広報する雑誌「ヨレヨレ」の編集執筆も手掛けることになる。

「よりあい」のモットーは、その人の混乱に付き合いその人に沿おうとすること。添うのではなく、沿うことだと鹿子はいう。しかし、それを実現するには人手と時間と根気を必要とする。「効率とは無縁の世界」なのである。

「よりあい」は最初、寺の茶室を借り、「お寺のよりあいのふり」をして始まった。それが施設名の由来でもある。そこで思い浮かぶのは、宮本常一の『忘れられた日本人』に収録された「対馬にて」の「村の寄りあい」だ。対馬では、村で何かの取り決めを行う場合、全員の納得がいくまで何日でも話し合う。全員一致に意見がまとまるまで、いつまでも議論する。部外者の目から見ると大変面倒なものと思われるかもしれない。しかし面倒を見ること、面倒なことに寄り添うことこそ、いまの社会が最も必要としていることなのではないか。

鹿子は「よりあい」をめぐる顛末を、饒舌(じょうぜつ)な文体を使って描きだす。そんななか次のような本質的な言葉がちりばめられている。「ぼけた人を邪魔にする社会は、遅かれ早かれ、ぼけない人も邪魔にし始める社会だ。(略) どれだけ予防に励んでも無駄だ。

わたしはぼけてない、話が違うじゃないかと泣き叫んでも無駄だ」

面倒に寄り添うことの困難さと大切を、笑いも箴言（しんげん）とともにこの本は教えてくれる。（ナナロク社・1500円＋税）

### 子育て支援の先進事例報告...来月7日、東京で

読売新聞 2016年01月24日

子育て支援団体などで作る「にっぽん子育て応援団」は2月7日午後1時半から、東京都港区の発明会館ホールで、子育てを地域で支える体制作りについて先進事例の報告会を開く。

妊娠中から子育てまで様々な相談に対応する総合窓口を開設している三重県名張市や、高齢者支援と子育て支援を兼ねた施設がある北海道北見市など8自治体の取り組みについて報告する。事例から見えてくる子育て支援の課題も考える。



報告会では、応援団団長で評論家の樋口恵子さんが、各世代が支え合うコミュニティ構想について講演。先進自治体で活動するNPO法人担当者らのパネルディスカッションもある。

応援団は2015年度から3年間、公益財団法人さわやか福祉財団の委託で、子育てや介護を地域で包括的に支援している各地の先進事例を調べる。

参加無料。定員200人。申し込みフォーム (<https://ssl.formman.com/form/pc/z1BDpc3cLtw2IIK/>) か、氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを記し事務局のファクス（03・3269・3314）へ申し込む。締め切り

は2月2日。問い合わせは、事務局のメール（[info@nippon-kosodate.jp](mailto:info@nippon-kosodate.jp)）へ。

### 「闇の中にこそ光」 ダウン症の書家・金沢翔子さん「自立」報告

東京新聞 2016年1月24日



講演する書家の金沢翔子さん（左）の母泰子さん＝台東区で

ダウン症の書家として知られる金沢翔子さん（30）の母、泰子さん（72）＝大田区＝の講演会（東京新聞後援）が二十三日、台東区であった。社会福祉法人美谷（みたに）会（岐阜県関市）が主催。「母と子、二人三脚で歩んだ道」と題して、これまでの子育ての日々を振り返った。

泰子さんは、翔子さんが五歳のころから書道を教えるようになった。ダウン症であるため、親として希望した小学校の普通学級に通わせることができない時期もあったが、その時期に書家として力を育むことができたといい、「闇の中にこそ光がある」と話した。

翔子さんも登壇し、三十歳になったのを機に、実家の近くで一人暮らしを始めたことを報告。泰子さんは「自立することが願いだっただ。私にとって一番の収穫です」と目を細めた。

美谷会は、知的障害のある子どもらの活動を支援する事業所「結（ゆい）ふる美谷東京」（台東区東上野）を運営しており、利用者の家族や一般市民ら約百人が聴講した。

### 発達障害理解に一役 「カップルの日常から学べる」エッセー

大分合同新聞 2016年1月23日

漫画を担当した寺島さん（右）と著者のくらげさん＝佐伯市内

佐伯市在住の漫画家・寺島ヒロさん（46）は障害者カップルの日常を描いたコミックエッセー「ボクの彼女は発達障害」の漫



画を担当している。「カップルの日常を通して、障害について学べる」と好評だ。

本に登場するのは進行性聴覚障害のあるくらげさん（ペンネーム、東京都）と、その交際相手で広汎性発達障害のあおさん。あおさんは「少々」や「適当」など曖昧な表現が多い料理本を理解するのが難しいなどさまざまな問題に直面する。そんなエピソードを彼氏であるくらげさんの目線で面白く紹介している。

本を出版するきっかけはインターネット。くらげさんは彼女との出来事を短文投稿サイト「ツイッター」につづっていた。以前から投稿をチェックしていた寺島さんは、本にしたら絶対に売れると直感し、「私が漫画を描きたい！」と手を挙げた。そのやりとりが編集者の目に留まり、本にまとめることになった。

「等身大カップルの日常から発達障害者との付き合い方が学べる」と評判となり、第1弾（A5判・160ページ）に続き、昨年7月には第2弾（題名は同じ、A5判・184ページ）も出版された。

くらげさんは昨年12月、佐伯市を訪れ、寺島さんに初対面した。くらげさんは「本に漫画があることでより多くの人が手に取りやすくなった」。寺島さんは「発達障害のある当事者が恋愛について語る機会は非常に少ない。他者を理解するという観点から多くの人に読んでもらいたい」と話した。

コミックエッセーは2冊（第1弾、第2弾）とも、それぞれ1400円（税別）。問い合わせは学研教育出版（TEL03・6431・1250）。

#### 定住者増につなげたい 栄町が国際医療福祉大にアパート、定期代補助



東京新聞 2016年1月24日

人口減少と少子化に悩む栄町は、隣の成田市で四月に国際医療福祉大学（本校・栃木県大田原市）の看護学部と保健医療学部が開学するのに伴い、町に転入する同大生のアパート代や通学定期代を補助する。同大は来年四月には医学部が開学。その後、付属病院も開院する予定で、補助制度は定住者増加につなげる狙いもある。（渡辺陽太郎）

アパート代の補助は月一万円が上限。通学定期は同大に通う場合、JR安食（あじき）駅と大学最寄りの京成公津の杜（もり）駅間の月額六千三百七十円のうち六千三百円（運賃改定で変動）を補助する。

制度は昨年四月、定期の補助を上限一万円として県内外の医療・福祉系大学に通う学生を対象に始まったが、まだ利用者は少ない。

町によると、安食駅周辺の学生向けアパートの家賃は月約三万五千～四万円。補助を加えると、成田市内の大学周辺より二万円以上安くなる物件もある。同大の初年度の定員は三百四十人で、すでに推薦などで合格を決めた、県内外の生徒十人ほどから問い合わせがある。合格通知にも、案内を同封してもらうという。

同大によると、大田原市の本校では栃木県外出身の学生がそのまま定住するケースが多い。同大担当者は「学生のコミュニケーション能力を養うため、地域と積極的に交流するよう勧めていることが大きい」としている。

習志野市のPRアニメのイメージ図と宮本泰介市長＝習志野市役所で医学部や付属病院設置に伴い、新たに集まる学生や教員などの数は五千～一万人に上るとみられている。

成田市が地の利を得る中、栄町も補助制度を突破口に新住民を開拓したい考えで、担当者は「町と人の魅力を伝える新たな方法を考えていきたい」と話す。



#### ◆習志野市 楽曲付きアニメでPR

習志野市はオリジナル楽曲付きのPRアニメを制作し、来月からテレビ番組などで流す。市の推計では、現在十六万八千人超の人口は二〇一九年の約十七万四千人をピークに減少、四一年には約十六万人になる。PRアニメで情報発信し、若者・子育て世代の定住を促し減少幅を抑えたいという。

習志野は市民の音楽活動が盛ん。ご当地キャラクター「ナラシド♪」も音楽好きの設定だ。PRアニメでは人気アニメ「ぱんきす！2次元」の音の精霊キャラクターたちがナラシドと共演する。六十秒、三十秒、十五秒の三タイプ制作する。事業費は約四百万円。

三十秒版には谷津干潟やハミングロード、習志野文化ホールも登場。「ぱんきす！2次元」のエンディングテーマに使われ、全国二十二局ネット放送の音楽番組「MUSIC LAUNCHER」で放映される。この番組は、千葉テレビで来月十七日から三月三十日まで毎週水曜日二十四時から放映予定。

十五秒タイプは来月十九日から一週間、京浜東北線・根岸線の一編成で一日最低四十八回放映。六十秒タイプは四月以降、東京・日本橋室町の中央通りに面した千葉銀行東京営業部の大型ディスプレイで流れる。（服部利崇）

#### おしゃれで女性に人気 コウノトリ米のおにぎり店 神戸新聞 2016年1月24日

見た目も鮮やかなおにぎりが並ぶ店内=豊岡市加広町



「コウノトリ育むお米」を使ったおにぎり専門店「58 N musubu (ゴー・ハチ・エヌ ムスブ)」が兵庫県豊岡市加広町にオープンした。カフェのような雰囲気の内には、丁寧にラッピングされた十数種類のおにぎりが並ぶ。見た目もおしゃれで、女性客を中心に人気を呼んでいる。

店主の沖中知香さん(35)は福井市内の短大に在学中、カフェでアルバイトをした。地元の食材にこだわったメニューや、厳選された食器、おいしそうに盛り付けられた料理などに触れ、飲食関係の仕事に対する興味が膨らんでいった。

卒業後は豊岡に帰郷し、事務職などに就いたが、昨年秋、県の女性起業家支援事業制度を活用して同店を始めた。「地元の食材といえば、真っ先に『コウノトリ育むお米』を思い付いた。お米といえばおむすび。ひらめきで開店を決めました」と沖中さん。「誰もが食べ慣れているおにぎりです

勝負するのは大変だと思ったけど、ここにしかない商品を提供していきたい」と意気込む。

ガス釜で炊き上げた米を木製のひつに移し、煮卵や焼きサバ、黒豆などの具材ごとに形を変えて一個ずつ手作りする。クリームチーズとめんたいこを合わせるなど、新しい味も追究。色合いにもこだわり、パーティー向けの注文も受けるようになった。

沖中さんは「お客さんの、『また買いに来たよ』の一言が一番の喜び」と話し、今後は地元の野菜を使った総菜などを販売することも考えている。

営業時間は午前11時～午後2時、午後4時～同6時。定休日は土、日曜日と祝日。同店TEL0796・23・5378（斎藤雅志）



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行